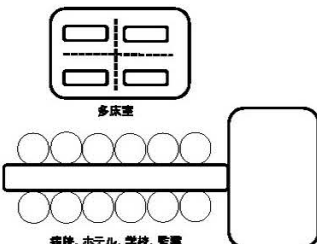
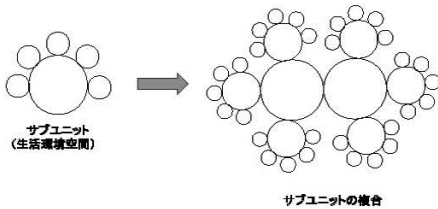


<h2>健康と持続可能性</h2> <p>哲学的環境デザインと人間の可能性</p> <p>稲垣 諭 東洋大学 文学部 哲学科</p>	<h3>Introduction : 何が健康を決めるのか？</h3> <p>健康の定義: 身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態であり、たんに病気あるいは虚弱でないことではない (WHO: 1948)</p> <p>問題点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 完全に良好な状態(理想形)は一つには決まらない</li> <li>• 生物学的な、医学的異常/正常によって健康は決まらない</li> <li>• 病気の豊かさと健康の貧困</li> </ul> <p>※健康は、医学的事実を超えて、当人が生活環境の中でどのような能力を活用してきたのか、そして今後、発見、開発、展開できるのかという潜在能力の豊富さを基準として特定できる (c.f. A.セン: ケイバビリティ・アプローチ)</p>
<p>以下では、健康という問題を</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・空間(環境)</li> <li>・皮膚/境界</li> <li>・レジリエンス</li> </ul> <p>という三つの観点から身体哲学的に考察</p>	<h3>空間(環境)と健康</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>・個人の健康は、 「環境の健全さ」と切り離すことができない。</li> <li>・生命が占める空間は、等質的で等方向的で等価値的ではなく、ニッチとは、そこで生きる生物の能力が発揮できる場所である。</li> <li>・都市空間、居住空間は、人間の健康や身体の可能性を考えて設定されているのか。</li> </ul> <p><small>C.F. David Schmid and Michael P. Lutzmann "Televisual Viewing and Time-Space Sedentary in Relation to Cancer Risk: A Meta-Analysis", 2013, BMC Public Health 13(1), Issue 710 1073/doi/10.1186/1471-2458-13-710</small></p> <p><small>Savitsky, R. "Beyond Food Deserts: Measuring and Mapping Racial Disparities in Neighborhood Food Environments" Journal of Planning Education and Research Summer 2008 27: 460-487</small></p>
<h3>空間と健康: 皮膚/境界</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>・5つの皮膚/境界 (cf. F. Hundert Wasser)</li> <li>・どのような皮膚に包まれている、囲まれているか</li> </ul>  <ul style="list-style-type: none"> <li>①表皮(生物)</li> <li>②衣服(個人)</li> <li>③家(建築)</li> <li>④同一性(社会)</li> <li>⑤地球</li> </ul>	<h3>空間と健康: resilienceという戦略</h3> <ul style="list-style-type: none"> <li>・頑健さ(robustness)と脆弱さ(fragile)の隙間</li> <li>・壊れても戻れるという弾力性、回復力</li> <li>・レジリエントなシステムこそが、持続可能なシステムである。</li> <li>・自然災害や犯罪、死別等々の心的外傷を負った人々の6割から7割は日常に復帰する。</li> <li>・着目すべきは、それらの人々にある経験のしなやかさ、弾力である。</li> </ul> <p><small>C.F. A. Zoller, A.M. B. J. R. "レジリエンス 復元力" あらゆるシステムの壊れと回復を分けるものは何か。Kessler, R.C., Sonnega, J., Bromet, M., et al. "Posttraumatic stress disorder in the national comorbidity survey", Archives of General Psychiatry, 52, 1995, 1048-1060. 38</small></p>

<p><b>空間と健康：resilienceという戦略</b></p> <p>【レジリエントな系(生態系等)の特性】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多様性と複雑さの維持</li> <li>・耐性強化としての中程度かく乱の機会提供</li> <li>・並行(代替)分散ネットワーク</li> <li>・中枢制御系の不在(キーストーンネット)</li> <li>・冗長性の活用</li> </ul> <p>※これら特性が組み込まれた建築的環境とは？</p>	<p><b>事例検討</b></p>
<p><b>事例①：高齢者の環境設定</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで自宅で療養していた高齢者が、老人用の介護施設等に移ることで、空間の経験そのものが変化する。</li> <li>・そうした施設に備わっている、だだっ広く、天井の高いホールや、無機質な(impersonal)談話室が、これまで獲得し、馴染んできた生活空間スケールからの逸脱を高齢者にもたらす。</li> <li>・空間はそこにあるものではなく、身体とともに順応する中で出現する。</li> </ul>	<p><b>事例①：高齢者の環境設定</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・日本には、いまだ病院の大部屋のような多床室からなる介護施設が存在する。</li> <li>・実際、多くの高齢者は大部屋に入れられることで、他者との接触を極力避ける方へと経験が誘導され、他人と目を合わせることや会話、食欲、自立的行為が、減少する。</li> </ul> <p><small>Cf. Y.Sotoyama, "Architectural environment and universal design", The way of thinking about the universal design, H. Kajimoto (ED.), Maruzen, 2002, p.111-160.</small></p>
<p><b>事例①：高齢者の環境設定</b></p> <p><b>単純化された環境</b></p> 	<p><b>事例①：高齢者の環境設定</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・特別養護老人施設「風の村」(千葉県)</li> <li>・この施設では、集団の行動を一律の空間的、時間的規則に従って管理するのではなく、いくつかの小規模な機能空間を「生活ユニット」として設定し、少数の生活者が独立に暮らせるようデザイン。</li> <li>・10人以下のサブユニットの中で、空間、時間的に固有に単位化された生活パターンが自発的に生み出される仕組みを取り入れている。それぞれの区画には個室と、ユニット専用の居間やテラス、トイレがある。生活単位があるとはいえ、別ユニットに属している人とのかわりが制限されているわけでもない。</li> </ul>

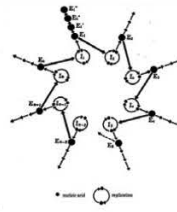
## 事例①:高齢者の環境設定

## 複雑化する環境—サブユニットの複合



## 事例①:高齢者の環境設定

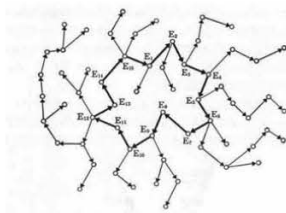
・ハイパーサイクル型(hypercycle model)の生活ネットワークの形成:それぞれの生活単位の活動が相互に影響を与え、図らずも全体として調和する。



■ ハイパーサイクルとは、ドイツの生物物理学者M.アイゲンが提起したものであり、生物の代謝機能等において、それぞれのサブユニットが機能的に閉じた化学反応サイクルとして活動しつつも、他への間接影響を行使することで全体性がそれとして担保される自己組織システム(self-organizing system)である。

Michael Eigen, "Self-Organization of Matter and the Emergence of Biological Macromolecules," *Neuroimagination*, 12, pp.465-523, 1971

## 事例①:高齢者の環境設定

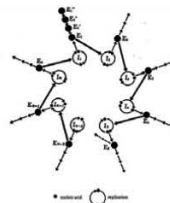


Michael Eigen, "Self-Organization of Matter and the Emergence of Biological Macromolecules," *Neuroimagination*, 12, pp.465-523, 1971

■ タンパク質の触媒回路網。●は酵素を表し、E1からEn1に向く矢印は、タンパク質の合成が触媒されることを示す。系が自己触媒的であるためには閉ループ(サイクル)が必要である。

クエン酸回路(TCA回路)といった生化学反応回路もその一つ。

## 事例①:高齢者の環境設定



・可能な限り、外部からの強制的な全体性や、一律的規則を持ち込むことなく成立するネットワークを確立する。それ自体は、自然にも内在する仕組み。

■ 「ユニット内の自律性」と、「連動するユニット間の自律性」は異なり、それぞれに現われる問題の質も対応策も異なる。解離しそうなユニットの回復や、ユニット間の連動強化や、距離化といった問題にどのように対応できるかが焦点となる。

Michael Eigen, "Self-Organization of Matter and the Emergence of Biological Macromolecules," *Neuroimagination*, 12, pp.465-523, 1971

## 事例①:高齢者の環境設定

・さらに施設内は、

- 1)「プライベート(個室)」。
- 2)「セミプライベート(ユニット内の居間)」。
- 3)「セミパブリック(ユニット間の交流場所)」。
- 4)「パブリック(一般市民にも開放された場所)」

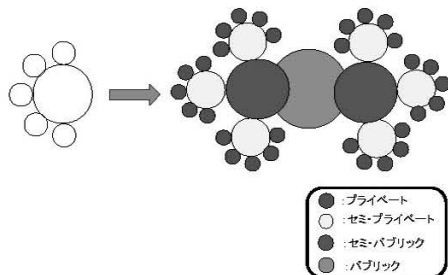
というようにゾーン化され、空間経験の質と差異が重視されている。

※そこには、居住者の「数居行為」が何重にも組み込まれている。

・ベンヤミン(W. Benjamin)が取りあげた「数居(Schwelle)」の経験では、そこを越える行為が経験の質を変えるだけでなく、数居を跨ぐ主体の導く強い意識、情動も変化させる。それは物理的境界ではなく、人と人との相互のかかわりが作り上げる本来は見えない経験の質的境界である。恋人の家の門、空港内の免税店、湖面、墓地、正月、婚姻、治癒、これらすべてが数居行為に関連し、固有な境界を産出する。

## 事例①:高齢者の環境設定

## 境界の複雑化—ゾーン化された環境



<p><b>事例①: 高齢者の環境設定</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・数居の経験には、             <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 数居の内外という境界区分、</li> <li>2) 行為する場所への気づき</li> <li>3) 選択的な行為機会の提供</li> <li>4) 領域に応じた行為可能性の変動</li> <li>5) 数居を超えることで再編される認知や行為の予期</li> <li>6) 超えられない数居という経験の限界の感じ取りが含まれている。</li> </ol> </li> <li>・どのような数居を超えられるか、どれくらいの境界に日常で接しているかが、行為者の健康の指標のひとつとなる。自宅の周囲から外へ出ることができない高齢者が多数いる一方で、70歳を超えても海外旅行が楽しみではない高齢者もいる。どこかに経験の分岐があったことは確かである。</li> </ul>	<p><b>事例②来るべき人間の健康</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・喫緊の健康問題             <ol style="list-style-type: none"> <li>1) 社会ネットワークへの参与可能性の制限(教育、労働、家族、友人関係や地域コミュニティへの参与障害等) → 風の村</li> <li>2) 運動や動作を伴う行為可能性の制限(運動感の減退、感情障害、疼痛、痺れ、拘縮、麻痺等)</li> </ol> </li> <li>・両者は相互に影響しあう。</li> <li>・2)を、現象学的な身体性への着目として理解する</li> </ul>
<p><b>事例②来るべき人間の健康</b></p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・荒川修作(1936-2010)の建築アイデア</li> <li>・彼の建築によるポイントは、生活の中で身体行為と経験の安定を恒常的に揺り動かすことにある。</li> <li>・荒川の建築思想的タームの中に、そうした仕組みを支えるものとして「切り閉じ[cleaving]」という働き/行為の概念がある。</li> </ul>	<p><b>事例②来るべき人間の健康</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・それは切ると同時に、切断されたものの相互の関係を修復し、連結し、隣接させる働きである。</li> <li>・荒川は、この切り閉じの膨大な集合体を、生命圏と訳される「バイオスフィア(Biosphere)」に代えて、「バイオスクリーブ(Bioscleave)」と呼ぶ。</li> <li>・例えば呼吸は、呼吸と吸気が繰り返される波のようなリズム。呼吸と吸気が入れ替わるその瞬間にだけ、大気との関わり「切れ目」が生まれる。つまりその瞬間、大気との関わりは切断される。そしてすぐに改めて回復される。</li> <li>・仮に呼吸が回復されない場合、身体は硬直し、生命の断念に近づくか、もしくは驚き、身構え、落水、膝下という呼吸とは別の行為が実行されている。切り閉じという概念は、それを通じた経験の断片化を意味する。またそれは、単に切断するだけではなく、同時に次の経験の結合、再組織化することに貢献する行為の総称である。</li> </ul>
<p><b>クリーヴィング/切り閉じという経験</b></p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・三鷹市にある「天命反転住宅」には、そこで暮らすための使用マニュアルがある。その一つに、「部屋の内部と外部で切り閉じられる大気との出会いと別れを大切にしたい」という指示がある。</li> </ul> <p><small>The Incredible Destiny with METEON in Memory of Kikun Kikuchi in Mitaka, Tokyo by ANAICARINA+GISE</small></p>	<p><b>事例②来るべき人間の健康</b></p>  <ul style="list-style-type: none"> <li>・球形、円筒形、正方形、十字形といった多様な幾何図形をユニットとして組み合わされた空間からなる。さらにそこでは凹凸の床や、窪みといった高低差がいたるところに活用されている。</li> <li>・バリアはフリーどころかいたるところにあり、ユニバーサルデザインに必須な直観的な使用法も提示されず、そもそもどのように使用すればよいのかが決まらない物や形ばかりである。</li> </ul> <p><small>Metabolism of a housing complex by ARAI Kazuo + Gise</small></p>



Figure 3-2: Model of a housing complex by ARAKAWA + Gsm.

- この住宅には、事前の強制的枠組みや、区分け、使用の規則はない。というより、むしろ自分の身体を空間にどうように作り直す中で、みずからの住処と規則を発見していかなければ、既存な世界の設定と、自発的な規則の出現は、ハイパーサイクルの二重螺旋性を発現するための最小条件であり、そこでは敷居もそのつど立ち上がり、繰り返し引かれ直す。
- この住宅では、そこで暮らすことで「人間は何者になりうるのか」だけが問題になっている。このままの人間ではいられなくなる住宅。これまで一度も存在したことのない新しい人間、新しい共同体のための住宅。それが、荒川が「天命反転」というモチーフにこめた思いである。

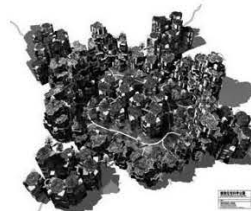


Figure 3-1: Resonable Destiny Eco-Housing Park by ARAKAWA + Gsm.

- したがって人間の健康を、既知の健康の余白を埋めるように状態化してはいけない。新しい自分の境界が意図され、経験の幅も、行為の幅も異なる局面へと開かれるようにこの住居デザインを活用するのである。
- 健康であることは状態ではなく、そのつど身体の状態と経験の可動域の拡張とともに発見される。こうした身体を使い方があったのか、このような事象とのかかわり、こんな人とかかわり方があったのか、そうした経験の進展に相関するようにして健康は展開する。



Resonable Destiny Eco-Housing Park by ARAKAWA + Gsm.

- 三鷹の集合住宅は、そもそも住宅にとどまることはできない。集合住宅が縦横に集まり、集合区になり、街になる。そうやって初めて一個一個の住居が効果を発揮する。そうした建築デザインである。こうした荒川の構想から、私たちは、哲学は、何を学び、どのような健康を獲得できるのか、未来が試されることになる。

For the future human - thank you